

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組 1】(A 中学校)

学校運営協議会が主催となった放課後カフェの取組は、年数回、放課後に行われている。飲み物を飲みながらゲームを楽しみ、友達と対面で遊ぶ貴重な機会となっている。教職員も生徒と一緒に遊び、会話を楽しむ様子が見受けられた。また、毎週水曜日の放課後には、話したい教員の希望を生徒から取って、生徒面談を行っている。事前に話したい教員や話す内容についてアンケートを実施し、その結果を基に教員と全校生徒が放課後に 15 分程度、面談を実施している。様子が気になる生徒がいる場合は、教員が生徒を指名して話を聞くことができるとともに、学習への不安をなくすために生徒の希望に応じて補習を行う。



【取組 2】(B 中学校)

昼休みに体育委員会が定期的に、全校生徒及び教員が参加できるレクリエーション「昼スポ」を企画している。実際に参加した生徒だけでなく、教室や近くから応援する生徒を含め多くの生徒が楽しんでいる。全員が活躍し、互いに認められる場や機会をつくっている。



【取組 3】(A 中学校)

自己決定の場として「自分の考えがもてること」をゴールにした授業を提供できるよう、共通の授業デザインの下、全教科で実践している。

具体的には、単元の中で多様な考えが生まれるような「考えさせる問い」を設定し、個人で考え、次に集団活動で交流し、再び個人で考え直すという流れをつくっている。様々な考えに触れて、生徒一人一人が自分の考えをもち、決定することができるようになった。

【取組 4】(C 中学校)

1 年間を通じ、計画的にいじめや不登校への理解についての校内研修を実施している。1 学期には、不登校対応巡回教員による東京都の不登校の現状と未然防止の取組の重要性について協議した。2 学期には、SSWによるいじめと不登校の支援について協議した。3 学期には、外部講師を招いていじめと不登校について教職員で理解を深めた。

多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（D中学校）

不登校の生徒には、長期的な支援が求められる。また、細かい変化に応じて対応の仕方が変わるため、毎週の支援会議では、現状把握、支援策の検討、支援の共有などを「実施のサイクル」として継続して行っている。また、不登校生徒のリストや情報、変容が一目で分かるように、データをデジタルで管理している。

アウトリーチによる支援（D中学校）

本市では、給食センターも不登校支援に活用できる。生徒の自立に向け、社会との関わりを増やす目的で行っている取組で、人との関わりに不安のある生徒に、SSWと連携を図り、給食センターへ1人で通う練習を1学期からしている。2学期は1人で利用ができるようになった。

校内別室における支援（B中学校）

ハンモックやソファを設置している。教室とは異なる環境を整備し、リラックスできるように配慮している。ソファやハンモックに座りながら会話することで、家庭にいるように感じると話す生徒もいた。パズルや折り紙、ゲーム等を行いながら、コミュニケーションをとり、良い人間関係を築けるよう支援している。また、放課後は校内別室を開放して誰でも利用できるようにしている。



デジタル機器を活用した支援（D中学校）

言語に苦手意識のある不登校生徒に対して、映像や画像等をプロジェクターで投影し、拡大して映すことで、語彙の習得に効果的な支援が実現できた。文字だけでは伝わらないものを映像等で補足して理解を促すことができた。



関係機関との連携（C中学校）

本市では、地域の図書館も不登校支援に活用できる。不登校生徒の中には、学習の遅れに不安を感じる生徒もあり、週に1回朗読ルームを借りて、数学の学習の学び直しに取り組んでいる。学習の支援を行うことで、自らが目標や希望をもてるように支援している。

成果

ある中学校では、14人中7人の生徒が、小学校時は不登校であったが、中学校入学後に教室復帰ができた。中学校を中心にSSWや関係機関と連携を図り、継続的な支援を実施した。

課題

不登校生徒だけでなく、全校生徒を対象とした居場所づくりとしての校内別室の仕組みを検討する必要がある。